

平成 25 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」（共同利用型）成果報告書

榎本武揚と日露関係

醍醐龍馬

榎本武揚といえば箱館戦争で新政府に最後まで抵抗した海軍提督としてよく知られている。しかし、その後の彼が明治政府のロシア通政治家として重きをなした事実はあまり知られていない。箱館戦争後の榎本は、幕末以来の日露領土問題たる樺太問題を解決するために初代駐露公使に任命され、サンクトペテルブルクにわたり 1875 年に樺太千島交換条約を締結した。当地では、ペルーとの間の国際紛争をめぐってロシア皇帝に仲裁を依頼していたマリア・ルス号事件の国際裁判の進行も担当し、日本勝訴の判決を勝ち取った。また、1891 年にロシア皇太子が襲われる大津事件が発生した際には、旧幕臣ながら外務大臣にまで抜擢され対露関係の修復につとめている。このように榎本は、時の最重要課題が日露関係になるたびに対露外交の最前線に抜擢され大きな役割を果たした。

報告者は、このような榎本武揚という人物を軸に据えて、19 世紀後半の日露関係に関する考察を重ねてきた。日本側の立場から研究している報告者であるが、これからは日本語史料のみならずロシアを含む諸外国の史料も積極的に導入しながら研究する必要性を強く感じ、この度、スラブ研究センターに滞在させていただいた次第である。スラブ研究センター図書室で主に調査した史料は、レンセン・コレクションである。そのほか、駐露米国大使が本国に宛てた外交文書も有用であった。アメリカ外交文書はその一部が FRUS として活字化されているが、そこから脱落している部分を穴埋めすることができた。スラブ研究センター図書室以外にも、附属図書館本館の北方資料室、文学部図書室が極めて有用であった。前者では、レンセン文庫、ギブソン文庫を大いに活用した。後者では、イギリス外交文書(FO.46)を調査した。ロシアだけでなく英米の史料も調べたことで、日露交渉に対する英米の介入や観察なども浮き彫りになった。

既に成果の一部は、修士論文「榎本武揚と樺太千島交換条約—『対等条約』の模索と政権基盤—」(2014 年 1 月 7 日、大阪大学大学院法学研究科に提出)、学会報告「樺太千島交換条約をめぐって—日・英・露の史料から」(日本史研究会、2014 年 1 月 16 日)にそれぞれ反映された。今後も、収集した史料の解読を重ね、さらなる研究成果の発表に邁進していきたい。同時に、ロシアの各種新聞や海軍論集など、今回の滞在期間中には閲覧しきれなかった史料も山積しており、スラブ研究センターを再訪する必要性を強く感じている。

末筆になったが、二度にわたる滞在中には、研究室の方々、図書室の方々には大変お世話になった。とくに専門領域が近い原暉之先生からは、有益な御助言を数多く頂いた。このような貴重な機会を提供して頂いたスラブ研究センターに厚く御礼申し上げる。